

所

属するシステムデザイン工学科は、社会問題の解決のため、縦割りの学問の枠にとられない総合的な工学の知識と能力を備えたエンジニア・リーダーの育成とシステムデザイン工学の確立を目指し誕生した学科である。昨年四月に二〇〇年の節目を迎え、建築分野の研究室からは二〇〇〇年度より卒業生が巣立っている。就職先は、メーカーだけでなく、建設会社や設計事務所、ライフライン企業、ディベロッパー、行政職など幅広い。建築に加え機械や電気・電子、制御工学など、モノづくりの横断的な知識を備えていることから、物怖じせず新しい分野に飛び込んでいく力を持っていると就職先から高く評価していただいている。

自身は専門の地震工学などの講義を担当しているが、建築分野の教員で「空間デザイン海外研修」というユニークな科目を輪番で担当している。少しこの研修を紹介したい。今年度は九月十一日〜二十日にスペインのアリカンテ、グラナダ、マドリードの三都市を回る旅程であった。八月にバルセロナのテロと北朝鮮のミサイル発射があり、学科内で開催見送りの意見も出た。しかし、このような時代であるからこそ、異文化を理解し積極的にコミュニケーションできる人材を育てていかなければならないと考え、リスク管理体制を強化し催行に至った。研修期間中もイスラム国によるテロの呼びかけや北朝鮮によるミサイル発射があり緊張が続い

各 人 各 説

細分化された学問と 分断された世界をつなぐ

慶應義塾大学 理工学部システムデザイン工学科 教授

小檜山雅之

Masayuki Kohiyama



だが、無事帰国できて胸をなでおろしている。アリカンテはスペイン内戦時に最後まで人民戦線派を支持していたためフランコ政権に冷遇され、復興まちづくりが遅れた歴史がある。現在は市がローマ時代の遺跡を生かした建築・まちづくりを進めており、初日には再開発事例の見学を行った。その後、アリカンテ大学の学生と合同で市内旧市街地のフィールドワークを行い、四日目に住民代表や市都市計画部のアドバイザーである建築家に向けてまちづくりに関する提言を行った。学部二・三年生にとって英語で発表を行うのは相当ハードな課題であったと思うが、スペイン人学生とチームワークで乗り切り、大変充実した議論を導くことができた。興味深かったのは、四つの班のいずれの発表でも街並みの好印象を与える要素として市の再開発事例が注目されなかった点である。個別の建築として優れていても、まちの魅力を高めるデザインを両立させることはなかなか難しいことを学んだのではないかと思う。その後を訪れたグラナダではアルハンブラ宮殿を見学した。マドリードでは二〇〇四年に爆破テロがあったアトーチヤ駅や、スペイン内戦を描いたピカソの『ゲルニカ』を展示するソフィア王妃芸術センターを多くの班が訪れた。都市・建築の背景にある対立や戦争の歴史を若い感性はどのように受け止めたであろうか。分断された世界をつなぐ存在となってくれることを願っている。